

# POINT OF VIEW

## 電子書籍はだれのものか



谷口 とよ美

図書館に目を向けたとき、電子書籍の導入が進んでいるとは言いがたい。電子書籍になった途端、その商流がデバイスや、電子図書館システムといった道具の購入とセットになっってしまう、それぞれの道具の柵の中に囲い込まれ、本としての一生が道具によって決められかねない状況にあるからだ。

電子書籍は、ITやPC操作に長けた時代の先を行くレジネスマンに似合うもの、そういったイメージがあったが、iPadを中心としたタブレット端末の普及とともに、あつという間に、そのステータスを越えた

スの力を借りることで乗り越えられる。文字の拡大機能、音声読み上げ機能は、高齢者の情報リテラシー向上の強い味方になる。また、色覚認識の問題にも対応できる。まさにユニバーサルである。

一方で、観光立国の動きは、「日本」というアイデンティティを世界に発信していくチャンスでもある。日本の特殊な文字文化を、グローバルに変換し、発信していく力を電子書籍は持っている。発信の矢印方向を変えるだけで一気に日本文化を世界にまで拡散させ、つなげることが出来る。まさにグローバルである。

今年、NTTデータによる「パチカン資料のデジタルアーカイフ化事業開始」という歴史的快挙のニュースがあった。パチカン資料の精密さと鮮やかさを、紙の状態と遜色ないデータに落とし込み、ウェブ上で公開を始めたことで、人類の知の集積の共有という素晴らしい仕事に着手した。話を戻して、日本の出版文化は、出版された本は「いつでも、だれでも、どこでも」買うことができる商流とセットになって成長し、文化の担い手としての理念を維持してきたと考えられる。しかし、電子書籍となった途端、その商流がデバイスや、電子図書館システムといった道具の購入とセットになって購読者や利用者の手元に落ちるようになる。だれでも、いつでも、そして広く利用に供する力を持つはずの電子書籍が、それぞれの道具の柵の中に

感がある。キオスクから週刊誌や漫画の山が消えていることに気付いたとき、若い世代にとって漫画や雑誌は電子書籍で見ると、定着したのかもしれない。

電子書籍はだれのものか、でもなり、だれのものにもならない。ロジックではなく、その表現が図書館における電子書籍時代到来の扉を開くものかもしれない。

たにぐち・とよみ リブ ネット社長。三重県生まれ。三重県職員などを経て、02年1月リブネット設立。13年ミライトグループに

電子書籍はだれのものか、でもなり、だれのものにもならない。ロジックではなく、その表現が図書館における電子書籍時代到来の扉を開くものかもしれない。

電子書籍は、ITやPC操作に長けた時代の先を行くレジネスマンに似合うもの、そういったイメージがあったが、iPadを中心としたタブレット端末の普及とともに、あつという間に、そのステータスを越えた

スの力を借りることで乗り越えられる。文字の拡大機能、音声読み上げ機能は、高齢者の情報リテラシー向上の強い味方になる。また、色覚認識の問題にも対応できる。まさにユニバーサルである。

一方で、観光立国の動きは、「日本」というアイデンティティを世界に発信していくチャンスでもある。日本の特殊な文字文化を、グローバルに変換し、発信していく力を電子書籍は持っている。発信の矢印方向を変えるだけで一気に日本文化を世界にまで拡散させ、つなげることが出来る。まさにグローバルである。

今年、NTTデータによる「パチカン資料のデジタルアーカイフ化事業開始」という歴史的快挙のニュースがあった。パチカン資料の精密さと鮮やかさを、紙の状態と遜色ないデータに落とし込み、ウェブ上で公開を始めたことで、人類の知の集積の共有という素晴らしい仕事に着手した。話を戻して、日本の出版文化は、出版された本は「いつでも、だれでも、どこでも」買うことができる商流とセットになって成長し、文化の担い手としての理念を維持してきたと考えられる。しかし、電子書籍となった途端、その商流がデバイスや、電子図書館システムといった道具の購入とセットになって購読者や利用者の手元に落ちるようになる。だれでも、いつでも、そして広く利用に供する力を持つはずの電子書籍が、それぞれの道具の柵の中に

電子書籍は、ITやPC操作に長けた時代の先を行くレジネスマンに似合うもの、そういったイメージがあったが、iPadを中心としたタブレット端末の普及とともに、あつという間に、そのステータスを越えた

スの力を借りることで乗り越えられる。文字の拡大機能、音声読み上げ機能は、高齢者の情報リテラシー向上の強い味方になる。また、色覚認識の問題にも対応できる。まさにユニバーサルである。

一方で、観光立国の動きは、「日本」というアイデンティティを世界に発信していくチャンスでもある。日本の特殊な文字文化を、グローバルに変換し、発信していく力を電子書籍は持っている。発信の矢印方向を変えるだけで一気に日本文化を世界にまで拡散させ、つなげることが出来る。まさにグローバルである。

今年、NTTデータによる「パチカン資料のデジタルアーカイフ化事業開始」という歴史的快挙のニュースがあった。パチカン資料の精密さと鮮やかさを、紙の状態と遜色ないデータに落とし込み、ウェブ上で公開を始めたことで、人類の知の集積の共有という素晴らしい仕事に着手した。話を戻して、日本の出版文化は、出版された本は「いつでも、だれでも、どこでも」買うことができる商流とセットになって成長し、文化の担い手としての理念を維持してきたと考えられる。しかし、電子書籍となった途端、その商流がデバイスや、電子図書館システムといった道具の購入とセットになって購読者や利用者の手元に落ちるようになる。だれでも、いつでも、そして広く利用に供する力を持つはずの電子書籍が、それぞれの道具の柵の中に